

(論 文)

19世紀前半期アメリカの「家庭」における動物と「痛み」の感性 — 動物愛護が語られる場としての「近代家族」に焦点をあてて

白石 (那須) 千鶴

キーワード

アメリカ中産階級 近代家族 動物愛護 「痛み」の感性 「暴力」嫌悪の感性

はじめに

動物は人間にとってどういう存在なのか？ この問いかけは特に近代以降、様々に論じられてきた。西洋近代哲学において動物は、自然の一部と見なされ、人類の発展のために利用可能なモノと捉えられながら、人間と同じように快不快を感じていることを重んじる議論もなされてきた¹。すなわち社会の中での動物の位置づけは、その社会の歴史の上に成り立っている。従って動物愛護の思想もその行動も、歴史的文化的構築物と捉えることは重要であろう。最近日本での上映が物議を醸した動物保護の映画『ザ・コーヴ』が映し出していた小競り合いは、この動物愛護が異なる文化間で相互不信の種になることを如実に表象していた。しかもそこでは動物を殺傷することが許されざる暴力行為として激しく非難され、倫理問題として糾弾されていた²。アメリカから遥々日本の小さな漁村にまで足を運んで、なゼイルカを守る「戦い」を繰り広げるのか？ この情熱的な行動は、平均的日本人が理解するのは容易ではない。

最近のアメリカ社会で見られるこうした暴力告発と倫理的主張としての動物愛護へのこだわりは、他にも例えば倫理的菜食主義として「動物に配慮するフェミニズム」の議論にも現れている。その中で「今や動物に配慮するヴェジタリアニズムは白人中産階級女性のアイデンティティである」³という言説が表明されているが、この主張は、肉食文化が西洋近代文化として導入された日本社会から見ると意外に感じられても不思議はない。こうした動物愛護へのこだわりは、果たしていつからどのようにアメリカに浸透したのか？ あるいは今日のアメリカ社会で動物に配慮するヴェジタリアニズムを白人中産階級女性のアイデンティティの拠り所と表現しえた根拠はどこにあるのか？ 少なくともこれらの問いに詳細な答えを見出す為には、アメリカの白人中産階級の価値観が形成された場である「近代家族」が登場する19世紀前半期に遡る必要がある。

近代のイギリスおよびアメリカの動物愛護の精神については、ジェームズ・ターナーやトマス・キースの研究において、17世紀中頃イギリスで誕生し、18世紀末にアメリカに伝承

しらいし (なす) ちづる：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 兼任講師

されていったことが論じられてきた⁴。とくに19世紀後半アメリカの人道主義者たちによる動物擁護運動について取り上げて議論しているターナーは、当時の人道主義者たちが「痛み」に敏感になったことを産業化、都市化による古き良き時代への望郷、即ち反近代的思考と捉えて論じている⁵。しかし、近代以前のアメリカ社会および西洋社会が「痛み」に敏感な感性を持った社会であったとは言い難い。むしろデイヴィッド・モリスが『痛みの文化史』で論じているように、「痛み」への感性も近代人が獲得してきた感覚と捉える方が妥当であろう⁶。しかも「痛み」への感性は、敏感になればなるほど苦痛は増すという特徴がある。こうした性質を踏まえると「痛み」に敏感な感性は、痛みを引き起こす「暴力」に対しても敏感な感性へと発展し、暴力を制御する思考へと連動していくことも想定すべきであろう。従って「痛み」に敏感な気運の高まりについての分析には、「痛みの原因」である「暴力」をも問題化していくことを視野に入れて議論する必要性も出てこよう。⁷

アメリカの歴史研究において今日では動物をテーマにした研究は、前述のターナー以降も継続的に出されている⁸。しかし動物愛護の歴史は、多数の動物虐待防止協会が組織され始めた19世紀後半から議論されることが殆どである。19世紀後半期の生体解剖反対運動はアメリカの動物擁護運動の起源として重要な意味を持つが、運動が展開されるにはその動物擁護の精神が育つ土壌まで遡らなければ十分な理解はできない。しかも生体解剖反対運動が一部の思想家たちに限定された運動ではなく、中産階級家庭の女性たちをも巻き込んだ運動であったことから、動物愛護の精神が一般の人々に浸透する過程の分析は不可欠である。

本稿ではこうした観点を議論するために、19世紀前半期アメリカの中産階級の家族と動物に焦点を当てる。動物愛護の精神がアメリカの「近代家族」の登場に果たした役割を分析するために、動物愛護が中産階級の人々の「痛み」や「暴力」に対する感性の獲得にいかに関与したかを論じたい。

I. 使用する一次史料の歴史的位置づけと先行研究

(1) 19世紀前半の家庭向け書物

本研究では、コンダクトブックと一般的に呼ばれている助言書や感傷小説、子ども向け読み物等の家庭向け書物を一次史料として使用し、そこに著された家族についての言説にかかわる動物愛護の感情を取り上げて分析していく。

ヴィクトリア期の文化についての研究で歴史家R・ブッシュマンは、当時多数出されていた家庭向け書物が、中産階級の文化媒体物として重要な機能を果たしていたことを指摘している⁹。貴族制社会イギリスから独立を果たしたアメリカは、本来本国イギリスとは異なる自国像として、公德心を持った「平等な」市民によって営まれる共和制社会の建設を旗印に掲げて独立を果たした。しかし19世紀に入り新しく富裕層に仲間入りする人々が登場すると、彼らはイギリスの上流文化、すなわち貴族の優雅さを規範とする「ジェンティリティ」を身につけることで自らの成功を確認した。そうした行為は例えば、子どもの名付け方、貴族との繋がりを見出そうとする家系図の流行、あるいは小さな足でつま先立ちした子どもの描かれ方に現れていた¹⁰。さらに興味深いことに、こうした貴族文化への接近は、読書の習慣により充足されていった。

新興の中産階級の人々にとって書物は、アメリカ社会で自らの成功を確認し同時に成功者の仲間入りを周囲に認めてもらうための重要な道具立てとして機能した。すなわち客間に本棚を作りそこに本を並べることは、識字能力、および読書という文化的習慣の存在を示す重

要な行為であったと同時に、書物が伝える価値観や知的情報内容を、本棚に陳列するその本の背表紙によって示すという役割も持った。イギリス貴族の宮廷作法指南書、さらにはそのアメリカ版ともいべきエチケットブックは、自ら粗野なアメリカ人から洗練された成功者として立派に変身を遂げるために不可欠な道具として広く人々に所持され読まれた。こうして経済的に余裕を持てるまでになった中産階級の人々の間に本を所蔵し読む習慣が広まり、その所蔵および読書の欲求を満たす媒体物としてエチケットブックのみならず、家庭向け書物が多数出版されていった¹¹。

19世紀前半の家庭向け書物からアメリカの家庭の特徴の変化について分析していったM・ライアンは、1820年代から40年代の間にアメリカでは父権中心の家族のあり方が母親の愛情を中心とする家族に変化していったのと時期を同じくして、当時の家庭向け書物の書き手も、社会で影響力を持った教会関係の男性から女性へと移っていったことを指摘している。とくに感傷小説と呼ばれるような新しいジャンルの出現は、当時の批評家たちによる芳しくない評価とは裏腹に、女性の人気作家を多く輩出すると同時に多数の女性読者を獲得し、「女性の領域」と呼ばれる聖域の形成に一役買うまでになっていった。その手法は、小説と実話の混同ともいえる実生活を題材とする設定でありながら、地理的移動性の高い当時の状況で失われつつあった大家族の絆にかかわって、感傷的に著された物語が人々に道徳倫理や礼儀作法を伝える役割を果たした。家庭向け書物は当時の核家族化していくアメリカの家族の必要性にダイレクトに応じていたことが論じられてきた¹²。

こうした文化媒体物としての役割を担っていた家庭向け書物にいかなる動物観が描き込まれていたのか、そこに著されていた家族をめぐるイデオロギーの言説との関わりから詳しく論じていきたい。

(2) 19世紀前半のアメリカ中産階級家庭と動物愛護についての先行研究

19世紀はじめのアメリカの家族形態が見せた大きな変化として、これまでの多数の研究から、次の3つが提示されている。第一に家族のあり方が父権を中心としていたそれまでの形態とは異なり、母親の愛情が中心をなすようになったこと、第二に家庭内における男女の役割が分業化されたこと、第三に、愛情重視の子ども観が登場したことである¹³。またこの時期の家族の価値観についての研究では、感受性(sensitivity)が重視された「女性の領域」の形成、愛情豊かな人間像を女性の特性とする「真の女性礼拝」、「女性の絆」、「家族性礼拝」などのイデオロギーの構築が詳述されている¹⁴。他方、こうした家族のイデオロギーにまつわる言説に現れる動物愛護に着目した研究は最近まで出てこなかった。

ヴィクトリア期アメリカの中産階級家庭について、これまでマテリアル・カルチャーを取り上げていたK・グリアは、最近の研究で同時期中産階級家庭の教育でペットへの愛情が果たした役割について詳述している¹⁵。グリアは、当時の中産階級家庭で動物愛護の感性が家庭倫理とともに育まれたことを、特に次の二点から論じている。第一に当時出された多数の子育て書において子どもに動物の扱いを教育する非常に実践的な動物愛護が展開されていたこと、第二に、19世紀前半で大きく変容した子ども観が、ペットと子どもを同一視する形で発展し、両者を「生まれながらに無垢で愛らしい存在」と捉えられていったこと、これらの点から当時の中産階級家庭の人々に愛情を重視する家庭倫理が新しい家族のあり方として大きな影響を与えていったと論じている。同時に動物と感傷性を結合した感傷的動物愛護は、むしろ家庭倫理がかなり成熟した1860年以降から本格的に登場する言説であったと捉えて

いる¹⁶。

もちろん、グリアは、感傷的動物愛護の登場の時期について明確な線引きをしている訳ではないが、19世紀前半の家庭内での道徳教育で感受性が強調されていたというライアの指摘は無視できない。感傷的動物愛護の登場がいつからであったのかは、動物愛護の感情が感受性重視の新しい家庭の登場に果たした役割の大きさを理解する上できわめて重要な点となるはずである。しかもグリアは、父親の家庭内での役割についての分析は行っていない。これまでの家族史研究においても、長い間父親の役割については重要視されてこなかった¹⁷。そこで、本稿は、グリアの研究成果を踏まえた上で、さらにそこで使用されなかった史料も分析対象に入れて19世紀前半期における中産階級家庭と動物愛護の関わりを、とくに感傷的動物観に着目しながら、父親と母親両者の家庭内での役割から論じていく。革命期から19世紀前半期にかけて大きな変化を見せ、多数の新しいイデオロギーを形成していったアメリカの家族のあり方に、どのように動物愛護の精神がかかわっていったかを、父親と母親の両領域を取り上げて詳述したい。

II. 動物愛護のメッセージと「近代家族」

(1) 父権を重んじる子育てと動物への愛情

19世紀はじめのアメリカの家族形態が父権中心から母親の愛情中心に変化していったことは、徐々に移行していった現象である。19世紀に入っても30年代40年代まで父権を重視する古いニューイングランド流の子ども観に基づく子育てアドバイスと、母親の愛情を強調する新しい子育てアドバイスが共存する状態が続いていた。しかもその両者の違いが著者の性別に反映されているとは必ずしもいえず、男性の著者が新しい家族観に基づいてのアドバイスを著している場合もあれば女性の著者が父権を重視したアドバイスをおこなっている場合も存在していた。

例えば当時の高名な牧師の一人であるトマス・シール (Thomas Searle) は、1834年の段階で「子育てはたくさんの小さな幸せを運んでくる」と記し、愛情を注ぐことを優先した、新しい子ども観に基づく子育てアドバイスをおこなっていた。彼はさらに、18世紀までアメリカ社会で父権を保つ為に広くおこなわれていた「意志を挫く (breaking the will)」方式の子育てから脱却した「子どもの意志」すなわち気持ちを受け入れる子育て方式を奨励している¹⁸。

4 他方、19世紀初頭から多数の著作を著した女性作家キャサリン・セジュウィック (Catharine M. Sedgwick) は、1835年の著書*Home*で中産階級のモデル家族、パークレイ家で息子、ウィリアムのしつけに父権を重んじる子育てを描出している。ウィリアムは、自分が大事にしていた犬を4歳の妹に台無しにされたことから腹を立て、彼女のペットであるマルチーズの子犬を熱湯に落とすという暴挙に出る。子犬は大やけどを負い瀕死の状態になり安楽死され、幼い弟妹たちは大泣きをする。それを見ていた父親が「苦痛を与えた者は苦痛を自ら知るべきである」として2週間、ウィリアムに家族とともに食事をとらせないと命じる。2週間後、自ら話したいと父親に申し出て「もう癪癪を起こしたりしない」という反省の弁を述べる息子に対し、父親は許しを与え家族の食事に参加させる決定を下す。¹⁹

セジュウィックは保守的なニューイングランドの豊かな家に生まれ育ち、家族の理解と応援を受けて多くの作品を執筆した作家である。この*Home*では、忍耐 (patience) を学ばせるところで父親の権威が明確に描き出されているのと同時に、ここでは子犬を死に至らせる

という場面を幼い子どもたちの涙とともに描き出していることも見逃せない。しかしセジュウィックの描く父子たちのシーンで、父親は子犬の死を悲しむ幼い子どもたちを慰めることはしていない。代わりに、子犬を傷つけ死なせたことを、間違っただけの行いであると明確に示すために、父親は最後まで中途半端な許しを与えない重々しい態度で描かれている。こうした形で動物愛護が、なおざりにされるべきでない重要な事柄として父権とともに著されている。

19世紀前半にロロという少年を主人公にした膨大なシリーズを著し、子ども向け読み物を最も精力的に著していったジェイコブ・アボット (Jacob Abbott) は、1835年の *Rollo Learning to Read* で子猫の扱い方を息子に熱心に教える父親像を描いている²⁰。その父親は、子猫には「やさしく穏やかに」接してあげないと馴化できないことを息子に繰り返し教え、人間に全く馴れていない怯えきった子猫に忍耐強くコミュニケーションをとる手本を示していく。その息子は、一度は父親の教えに従ってその子猫と仲良くなるものの、再び子猫の尾を引っ張るなど思慮に欠けた扱いをして、結局その子猫と敵対関係となってしまう。その様子を見て父親は、最終的にその子猫を息子から取り上げ、動物好きの主人公ロロに預けることにする。子猫がロロのもとで他の動物たちとともに仲良く暮らしている様子を見たその少年は、穏やかにロロと過ごしているその子猫が、自分と折り合わなかった同じ子猫だとは気づかずただ「おとなしいロロの猫」を羨む形で描かれる。

著者アボットは、少年が子猫と仲良くなれなかった状況を繰り返し描き出すことで、やさしく穏やかに動物に接することの大切さを示し、同じ猫が他の少年と仲良く暮らす姿を描き出すことで子猫と仲良くなれなかった寂しさとともに動物に乱暴な態度をとったことの愚かさを読者に感じ取らせている。しかしそれだけでなく、ここで注目すべき点は、父親の描かれ方である。この父親は、子猫と仲良くなる方法を、自信を持って子どもに示し、その手本を忍耐強く子どもに教育している。息子とともに子猫にミルクを与え、忍耐と努力の末に子猫にそのミルクを飲ませる姿を、動物の扱いを熟知した優しく物知りな父親としてその子どもの羨望とともに描き出している。しかもその息子が思慮のない行動に出ると、毅然とした態度で子どもから子猫を取り上げるという厳しい決断も下しているのである。19世紀前半の子供向け書物には、こうした子どもと接する父親像が描かれているだけでなく、父親に向けて書かれた子育て書も多数存在していた。²¹

(2) 感傷的に表現される動物愛護と母親の愛情

先にあげた *Home* の著者であるセジュウィックは、他にも子ども向けのコンダクトブックを精力的に著し、子育てに対するアドバイスを行っている。その中で重要なメッセージとして「動物への愛情」を繰り返し提唱している。例えば1840年に出版された *Stories for the Young Persons* では、一人の子どもがニューヨークで計算のできる犬の話を目にして興奮していると、その子の母親は唐突に、ハイチの独立革命でフランス軍がブラッドハウンドを「黒人狩り」の為に使った話を持ち出し、訓練された犬の問題性を提起する。その上で、病弱で学校に行けない少女クララとその愛犬フットという心温まる感傷的な話を語ることで、犬が本来愛情深い動物であると教育する母親の姿を子ども向け読み物で描き出している²²。

その母親の語る物語でクララという少女は、時折意識を失う深刻な病気を抱えていつも愛犬フットとともに家の周りで一人過ごしている子どもとして描かれる。その少女があるとき、摘み取ったラズベリーが入ったかごを持ったまま気を失う。愛犬フットはいつものようにその深い眠りについた少女の傍らでしっかり寄り添って彼女が意識を回復するまで見守るので

ある。乱暴な少年がそのクララのかごからラズベリーを盗み取ろうとしたとき、フットはうなって威嚇し、必死に彼女とそのラズベリーを守り少年を追い払ったというエピソードを語ったその母親は、「彼女へのフットの忠誠心を思うと涙が出て止まらない」と結んでいる。犬の賢さではなく、愛情深さに感銘を与えることで子どもに道徳を心で受け止めさせようとしていることが伺われる。ここに子どもたちに動物を使って感受性豊かな心を植え付けようとする作者セジュウィックの意図が読み取れるのと同時に、母親が愛情を重視する道徳の教育者として描かれていることも見逃せない。

同作家による1844年の*Love Token For Children*では、「家庭動物は神から授かった偉大な、信頼し得る存在であり、鞭打ったり酷使したりすることは思慮のない行為である」として宗教心に訴える形で動物虐待を厳しく戒めている²³。このように、動物を神の被造物であると強調することは、第二次信仰復興運動が始まった1820年代から頻繁に使われた表現であり、人間も同じく神の被造物とされることから、共感および仲間意識を持たせようという意図と理解することが可能である。セジュウィックはこの表現を1854年の*Morals of Manners*でも用い、「犬や猫をいじめる少年少女は、仲間である人間にも同様に苦しみを与えるであろう」と警告し、「慈悲深い人は動物にも慈悲深さを持つ。偉大な人は動物とも友情を育む」と書いている²⁴。ここでセジュウィックは、動物の世話を通して慈悲深い人間に育つよう、子どもたちにペットを飼うことを推奨している。

同じく19世紀前半で多数の家庭文学を著したりディア・シガニー (Lydia Sigourney) は、1839年に*The Boy's Reading-Book*、1843年に*The Girl's Reading-Book*、さらに47年に*The Child's Book*を著し、アメリカの子どもたちの教育に深く関わりを持っていった²⁵。*The Boy's Reading-Book*では、子どもに牛や馬、鶏などの「家庭動物」への愛情を教育するため、牛不在の状態で4年間過ごしていたプリマス植民地の人々の苦労話や、馬を自分の子ども同然に大事に育てるアラブ人の話、ヒキガエルを自分の庭で40年間大事に飼っていたイギリス人の話を著している²⁶。そうした上で「動物への残虐行為は恥ずべきこと、罪であり、過去の独裁者、残虐者たちは皆、子どもの頃動物虐待を楽しんでいた」として動物への思慮のない虐待行為を厳しく警告している²⁷。さらに森で羊飼いの親とはぐれた4歳の子どもを飼い犬が探し出し、自分のパンをその子どもの遭難現場に何度も運んで助けた話から動物の自己犠牲を学ばせ、つがい相手を乱暴な少年たちに殺されたコマドリが亡くした伴侶を恋しがりながら懸命にひなを育てる話から、愛情の大切さを学ばせるなど、動物を「配慮に値する賢明な存在」として捉え模範とする言説を展開している²⁸。シガニーの動物を教師とするこうしたストーリーは、勤勉なアリ、忍耐強いクモなど昆虫をも題材に取り上げて展開されている²⁹。

シガニーは、子どもの道徳教育に動物への愛情を題材とする手法を取る点では先にあげたセジュウィックと同様であるが、これを母親の役割として強調しているところに特徴がある。6 すなわちシガニーは、1838年の著書*Letters to Mothers*で明確に、子どもの教育が母親の大事な役割であると伝えている。その中で特に、子どもの動物への扱いを幼児段階から注意深く監視し、動物への幼児特有の悪意のない粗暴な対応にも注意を与えて優しい扱いを教えるよう忠告している³⁰。そうした母親の教えと動物へのやさしさというテーマが興味深い形で現れるのは、例えば*The Girl's Reading-Book*の中の感傷的な詩である。そこには、母親の墓に一人で訪れる少女がセンチメンタルな詩の形で描き出されている。その詩の中でその少女は、やさしい声で犬を撫でること、かわいそうな子猫にやさしくすること、窓にいるハエ

さえ殺さないでいることを、「母親から教えられたこと」として回想し、「今でもちゃんと守っている」と母の墓前に語っている。そこで母親の声が鳥のさえずりとともによみがえるという、非常に感傷的な形で動物への愛情教育を母親の役割として表現しているのである。³¹

子どもの道徳教育、情操教育が母親の重要な役割であるとする見方は、1855年のコンダクトブックにも明確に現れていく。*Woman in her Various Relations*という若い女性向けの助言書では、子どもの娯楽について「何を許すか決定するのは母親の義務である」と記し、「痛みを与えたり、傷つける行為は許可してはならない」、「動物を脅かしたり嫌がらせをすることは間違ったことであり、鳥を巣から盗んだり、気晴らしの為に釣りや狩りをしたり、競馬やサーカスを見に行ったりするような、子どもを興奮させる有害な娯楽は許可すべきではない」と女性たちに助言している³²。

こうして家族の中で子どもの教育が重要視され、母親がその子どもの道徳教育の重要な役割を持つようになっていったことがこの動物との関わりでも確認できるが、その道徳教育の題材として動物が登場する子ども向け書物が多数出版されていた。その子ども向け書物で動物が、子どもに感傷的な涙を誘うストーリーの重要な彩りとしてだけでなく、次に述べるように、賢明で力強い教育者として多数描かれている。

(3) 子どもたちに手本を示す動物たち

先にあげた羊飼いの子どもを助けた犬の話は、文体を変えてE・フォーレン (Eliza L. Follen) の1849年の子ども向け読み物*The Child's Friend*の中でも著されている。この作者は他に、2匹の飼い犬から忍耐を学ぶ少女の話も描き出している。その物語の中で少女は、スパニエル種の犬とプードル種の犬に餌を与えているとき、プードル犬がスパニエル犬の食べ終わるのを忍耐強く待つ姿にその少女は感心する。ある日、家で客を招いた時、客への接待のために少女は自分の食事を待たなければならないという状況になるが、その時、その少女は、プードル犬が自分の食事を我慢強く待ったことを手本にして忍耐強く待つことができたという話を引用し、「子どもに可能な限り、家庭動物の世話をさせることはよいことである。子どもたちは動物から忍耐を学ぶ。さらに、子どもたちが動物を愛することで、幼い心は動物によって開かれ、哀れみや思いやりを学ぶであろう」と動物愛護の子育て上の効果を詠っている³³。

先にあげた、当時最も多産なコンダクトブックの作者アボットは、*Agnes*という、目の不自由な少女とその愛犬を主人公にして感傷的な子ども向け作品も著している。その中で、「人間の心、とくに幼い子どもの心における道徳感情の発達是非常に重要であり、同情心を育てる影響力のある逸話はその教育に最も重要な作用を果たす」³⁴として子どもの心に伝わる道徳教育の重要性を説いている。同著者によるロロシリーズや賢明な犬ブルーノから多くの重要な美德を学ばせる*Bruno*は、そのシリーズの長さおよび再版数の多さから判断しても、子どもの心に響く動物物語の執筆に成功していたといえよう³⁵。*Bruno*は、少年たちより賢い名犬ブルーノが、忍耐強さ、忠誠心、愛情等の美德を体現する活躍を展開していき、登場する人間の子どもたちに手本を示す役割を果たしている。中でも最も感動的なエピソードは、次のような“Bruno and Robin”と題される章である³⁶。

この章で登場するのはブルーノとその飼い主の少年ヒラムおよび隣に住む少年ラルフである。このラルフはヒラムの持っている物を何でもほしがり、例えばヒラムの愛犬ブルーノを売るように要求し、断られるとブルーノをいじめるという問題のある少年として描かれてい

る。ある日、ヒラムが父親と狐狩りで捕まえて飼いだめた子ギツネを問題児ラルフが強引にほしがり喧嘩となり、ラルフは自分が貸していた首輪を勝手にその子ギツネの首から取り返し、それを自分の納屋に戻すが、その時の不注意で翌朝納屋が火事になる。ヒラムは、早朝、隣の納屋の屋根から黒い煙が立ち登るのを発見するとすぐさま、ラルフがそこで飼っているコマドリの存在を思い出すが、ラルフの日頃の行状を思い起こし、救出を躊躇する。

ところが名犬ブルーノは、ラルフが泣き叫ぶのを聞き、助けに行こうとヒラムをけしかける。そこでヒラムも考え直し、燃える納屋からブルーノと力を合わせてコマドリを助け出す。問題児ラルフはこれまでの行いを深く反省し、翌日から自分の食事に出された肉をブルーノに分け与えるという展開である。著者は最後に「邪悪な行いは善行で乗り越えよ」³⁷というメッセージを三回繰り返してこの物語を結んでいる。同書にはこの他にも森で迷子になった子どもを保護するブルーノの活躍も描かれており、誠実で愛情深くやさしい性質の持ち主として、この犬が子どもたちの読み物の中で模範を示す存在となっている。

ここまで取り上げた、子どもを中心に家庭を題材にした形の作品や助言書とは大きく異なり、動物そのものを題材とした助言書も登場している。例えば、J・ロウエル（James Lowell）による1845年の*The Young Pupil's Second Book*には、動物から昆虫まで多数の生き物を題材として、それぞれの生き物から学びとるべきエピソードが描き出されている。この著者も、動物の有益性、人間との関わり方の深さに言及し、とくに愛情深さ、忠実さを強調し、そうした美德を子どもたちに学ばせようとしている。しかもその中には、哀れなホームレスの男性が自分の唯一の友である愛犬トレイを寒い冬の日に亡くして悲しむエピソードや、長年一人の紳士と連れ添った愛犬が、紳士との死別後も、その紳士を慕い続け周囲の人々の涙を誘う話も描かれている³⁸。

このように、19世紀前半の家庭向け書物の中で提唱していた道徳性の高い子どもの涵養に、動物が道徳的配慮の対象物として、また道徳行為の体現者として大いに活用されていた。こうした動物への愛情は、子どもの教育の題材としてだけでなく、「好ましい人間像」にも深くかかわっていく。

Ⅲ. 動物愛護から創出される「理想的」人間像と19世紀初頭に展望された「家族」のあり方

動物への愛情を子どもの教育の重要項目として提唱していた子ども向けの書物で、子どもに動物への愛情を通して培わせる美德として頻繁にあげられていたのが「忍耐」、「慈悲深さ」、「自己統制」等である。動物へ愛情をかけることがなぜ忍耐強さの体得につながるのか？ 自己統制が実現していくのか？ こういう問いを立てると、動物へ愛情をかけることが動物を単に可愛がることを意味するのではないことが浮き彫りになってくる。大人である親の持つべき教育方針、子ども観をさらに視野に入れて考察すると、それらの美德の意味するものがより一層わかり易く理解できる。

8

(1) 良きキリスト教徒／良き市民として：「文明人」としての動物愛護

親である読者に向けた子育て書では、動物への愛情を体現することがキリスト教徒として、良き市民として、良き親として、あるいは良き夫として、必要であると議論されていく。良きキリスト教徒として動物に愛情をかけるべきであるという言説は、例えば先にあげたセジュウィックが「同じ神の被造物」という括りで動物への愛情をキリスト教徒の義務と論じる形で登場していた。1844年に動物愛護の為のコンダクトブック*Kindness to Animals*を著し

たイギリス人作家C・エリザベス (Charlotte Elizabeth) も同様に、キリスト教を動物愛護の必要性の根拠にしている³⁹。

*Kindness to Animals*の中でその著者は、次のように、動物への愛情をキリスト教徒の義務と捉える枠組み設定から始めている。

…神は人間をご自身の姿に似せて創られた。それは人間を神聖なものにするためであり、しかも正しく、よきものに、そして慈悲深きものにするためである。しかも人間は、ちょうど神がご自身でお創りになったすべてのものに対し注意深く愛情深い統治者でおられるのと同じく、人間も哀れな口の利けない動物たちの注意深く愛情深い統治者であるよう、創られている⁴⁰。

すなわち、動物に注意深く愛情深い扱いをすることは、良きキリスト教徒としてとるべき行動であることが、明記されている。こうした動物への態度は、さらに「良き市民」としての行動規範という形でも語られていく。

1856年の*The Power of Kindness*と題するコンダクトブックには、「思いやり (kindness) は最良の市民としての美德である」と論じられている⁴¹。その中で「動物への愛情 (kindness to animals)」は、「(人間が) 幸福になる不可欠の要素」として以下のように重視されている。

アラブ人は馬を自分の子どもと同様に愛情をかけて育てる。自分の食べ物を分け、同じボウルのミルクを飲ませ、家族と一緒に寝かせる。だから馬は彼らを愛しよく働く。… (中略) 我々も不必要な痛みを与えることは避け、同じように優しく扱うよう他の人たちにも喚起すべきである。… (中略) 残酷な人間は決して幸福にはなれない。神の被造物である動物を苦しめている人間は、同じく被造物であるその人自身が次に罰せられる番になるからだ。⁴²

さらにこうした動物への愛情深い態度を「文明人」のあるべき姿と捉えて、次のように続けるのである。

果たしてどちらが野蛮人であろうか？ 口の利けない動物を細心の注意で優しく扱う未開のアラブ人と、文明化された国に住む男であろうとも、馬を酷使して残虐に殴って自慢気な男と。… (中略) 何千もの高貴な動物たちが日々、重い荷物を背負わされ殴られ残酷に鞭打たれて苦しめられている、人間の姿をして自らを文明化され啓蒙されたキリスト教徒と自負した存在によって。⁴³

9

このように論じ、動物への思いやりをキリスト教徒としてだけでなく、「文明の国」アメリカの市民としての必要条件とする言説を展開している。

(2) よき夫／良き父親：動物愛護と「体罰を用いる子育て」からの脱却

動物が神の被造物であることから愛情の対象となるべきであるという言説が発信されているのであるなら、子どもが愛情の対象とされるのは当然のことといえよう。動物への思いや

りを文明人の義務と捉えていた前述のコンダクトブックは、愛情を持った教育が子どもに不可欠であることを強調する議論を展開し、親の子どもに対する体罰を「愛情のない叱責は子どもをだめにし、絶望的な気持ちにさせるだけである」⁴⁴と厳しく非難している。さらに興味深いのは、子どもの体罰が動物への体罰／虐待と同時に語られていることである。

例えば、1849年の子育てコンダクトブック、*The Fireside*の「体罰」と題する章で「子どもの教育に鞭を使うことは、ひどく危険なことである」として家庭や学校で体罰を用いることをやめるよう厳しく警告している⁴⁵。ここで著者は次のように、体罰放棄の必要性を動物の馴化の場合を例にとって説明している。

家庭動物は力で制御しようとするより、優しい扱いをする方がよりよく制御できるとよくいわれている。雄牛が付き棒で追われる所もあれば、鞭で打たれる所もあるという。(しかし)馬は暴力的やり方には抵抗するが、優しい声をかけながらなでることで容易に言うことを聞かせることができる例を幾度も耳にする。人間の性質が、動物より簡単に制御できるものか否か、競いあわせるのはやめようではないか。どの親も、全能の神の言葉を信じてその信念に従って行動するなら、優しく穏やかなやり方で子どもを諭すのに失敗するなどという恐れは抱かないですむはずである。⁴⁶

このように論じ、さらに体罰を次のように厳しく禁じていく。

多くの親たちが行っている鞭による子どものしつけは、親自身の面倒を省く為の行為である。論理的に考え諫める方が、間違いなく、手間がかかる。…親の怒りは子どもの中に怒りを生ませる。自己中心性からの鞭の使用は、必ず子どもに気づかれる。その自己中心的動機を見出したとたん、子どもの痾癢は引き起こされ、生涯、復讐の機会を待つ性質にさせてしまう。子どもに復讐心に燃える心を抱かせるだけである。⁴⁷

つまり体罰とは、親が子どもに苛立ち、その苛立ちを自己の中で統制できず、痾癢を起した時にとられる手段と捉える見方が提示されているのである。良き親とは、「論理的に考え、子どもを諫める」親、すなわち忍耐強く、愛情を持って子どもに我慢強く接して物事を諭す親として論じられている。つまり親が実現しなければならぬ美德項目として捉え直したとき、動物愛護で獲得する美德が、実は子どもの教育に必要とされる親の徳目でもあることがわかる。

10 先に取り上げたアボットのロロシリーズに描出されていた子猫をなつかせる為に忍耐を繰り返し教えていた父親⁴⁸は、実は忍耐強く子どもを教育する愛情深く忍耐強い、自己統制のとれた父親像の表象と捉えることができよう。幼い子どもの読み物を選んで子どもに与えるのは母親の役割であったとする従来の近代家族の規範分析から判断すると、このメッセージは直接父親に伝わっていたか疑わしいことにもなろう。しかし、育児書での体罰放棄の訓戒やこうした子どもと接する父親像の描出から、むしろ子育てに父親もかなり加担していたと読み取ることも可能でありまた必要なのではないか。

これまでの近代家族モデルの研究では、男女の役割分業の派生から母親の家庭内での役割を強調する議論が盛んであった。そのため、父親の近代家族での役割が「生活の糧を運ぶ存在」としてのみ捉えられがちであった。しかし聖書を解読するための教育は植民地時代から

父親の役割とされてきており、その習慣は「母親の教育の領域は心、父親の領域は知性」⁴⁹というキャプションが1838年の子育て書*Fireside Education*にもあるように、父親は子どもの読み書きを含めた知的教育に携わる当時の規範が、19世紀に入っても存続していたことが歴史家S・フランクによって指摘されている⁵⁰。賃金を得る仕事が家庭から切り離されたことから父親の領域は家庭外とされがちであったが、こうした研究が示しているように、良きキリスト教徒としての父親像は、稼ぎ手としての役割と家庭の中で良き夫、良き父親としての役割の両立を可能なものと捉えていたことが伺える⁵¹。日中は家庭不在の父親も、食事および食後の時間を、子どもに本を読んで聞かせ家族に豊富な知識を提供するための貴重な機会として捉えていたとの指摘もある⁵²。従って、ロロシリーズをはじめとする子どもの読み書きの練習本を父親が手にする機会があるものとして子ども向け読み物が書かれていたと見ることは十分可能であろう。

あるいは、こうした家庭向け書物に描かれる父親像は、子どもの心に残ることも想定されて著されていた側面も見逃せない。少年たちが、動物に思いやりのある行動をとることを立派なおとなの模範として記憶することを意図していたと読み取ることは重要であろう。つまりこの子ども向け読み物では、忍耐強く愛情を持って動物と子どもに接する統制のとれた父親像を理想の姿とするメッセージが親と子の両世代に向けて発信されていたといえよう。

(3) 体罰否定の意味するもの：「暴力のない安全な近代家族」像

これまでの研究においても、愛情を重視するアメリカの近代家族は、革命期から1830年代に登場したことが論じられてきた。植民地時代以来、生産の重要な場となっていたアメリカの家庭は、18世紀末から19世紀前半期にかけて、経済的必要性ではなく愛情を要とする場に変化していた。しかも子どもは大人とは異なる存在で、愛情をかけた養育を必要とする特別な存在と見なされるようになっていった⁵³。こうしたアンティベラム期の中産階級家庭は、新しい家族観、すなわち「家庭は楽園であり避難所」という見方を生み出していったが、逆に家庭の私的領域化が家庭内での虐待や暴力の存在を見えにくくさせたことも指摘されてきた⁵⁴。

他方、アンティベラム期の人道主義者たちによる体罰防止運動は、囚人、水夫、奴隷などへの体罰を問題化するなど、精力的に運動を展開し、処刑現場を公の場から締め出すという成果を上げていった⁵⁵。1848年の議会でのスピーチでは、体罰が「封建主義的で野蛮な行為である」⁵⁶という言葉説を使って強く非難されていた。こうした体罰反対の人道主義運動に対する中産階級の人々の関心は高く、学校、刑務所、海軍での体罰が次々と問題化されていったのである。しかし、家庭内での暴力への問題化は、対照的に立ち後れていったのが現状であった⁵⁷。

家庭内の暴力に対する法的制限が遅れたのには次の二つが指摘されている。ひとつには、子どもをしつける権利は、神から与えられた親の権威であるという考え方への固執が存続していたこと、さらに中産階級の家庭のプライベートな性質が増したことである⁵⁸。こうした状況にあった19世紀前半期の中産階級の家庭では、不可視化された暴力が存在していた訳である。すなわち、動物への優しさを繰り返して提唱していた家庭向け書物は、まさに「暴力のない理想の家族モデル」を具体化して提供していたと言えよう。

そこには動物愛護を通して、愛情深い母親像とともに、穏やかに子どもに接する父親像も描き出されていたことを本稿は照らし出してきた。しかも近代家族モデルの中で語られてい

た動物愛護は、ただ単に動物への哀れから発信されていたのではなく、「暴力」を嫌悪する感性を培う機会とされていたことが特徴としてあげられることを、特に指摘したい。

例えば、賢明な動物たちを子どもたちの手本とさせることで、子どもたちに生き物を尊重する心を学ばせていた。子どもたちは、小さな生き物にも決して暴力を振るわないことを美德と教えられ、同時に忍耐強さを学ぶことも期待された。母親は、動物への優しさを説くことで子どもを愛情深い人間に育てる模範的な母親像として登場していた。すなわち「母性愛は、非暴力の模範である」⁵⁹という従来の指摘が、動物愛護を通してより一層効果的に提示されていた。さらに動物を優しく馴化する父親は、動物にも子どもにも決して体罰を加えない穏やかな存在として描かれていた。「近代家族」は、暴力を決して用いない「安全な家庭」となってはじめて、「楽園であり避難所」たり得たのである。

むすびにかえて

「暴力の存在しない安全な家庭」のイメージは、愛情深い母親像を描き出すだけでは不十分であり、暴力を用いない穏やかな父親像を提供して初めて安泰となる。子どものしつけは神から与えられた親の権威の行使の正当な手段とする見方が残存する中で、家庭向け書物の作者たちは、動物愛護を通して愛情重視の価値観を繰り返し描き出し、不可視化されがちな家庭の内部を安全な場所にしようと強く求めていたことが読み取れよう。動物愛護は、「痛み」に敏感な近代家族の形成には不可欠なメッセージを携えていたといえまいか。

19世紀前半期の近代家族を、動物愛護が語られる場として見ていくと、以上のようにそこには暴力に対する嫌悪の姿勢が読み取れるが、それが単に動物のための信念ではなく、むしろ人間社会に向けた暴力嫌悪の政治的イデオロギーとしての意味を色濃く持っていたことも指摘できる。例えば、子どもに少女と愛犬フットの話を通じて愛情重視の道徳教育を行う母親像を提示していたセジュウィックは、その物語の中で猛犬ブラッドハウンドをハイチの独立革命で「黒人狩り」にフランス軍が使用した話を展開していた⁶⁰。愛情深い従順な動物として語られ始めていた犬が、暴力的扱いを受けることでいくらかでも凶暴になりうることを子どもたちに教唆していたのである。しかもそうした意図的に創り出された凶暴性が、人間の暴力行使の手段として利用されていることを強調している。つまりここで著者セジュウィックは、暴力が暴力を生み出すという「暴力」の連鎖性を提示し、さらにハイチの独立革命という「家庭の領域」を超えた設定で暴力の全てを否定しようとする政治的メッセージを込めていることが読み取れる。

12 19世紀前半期の動物愛護のメッセージに、こうしたフランス革命にかかわる政治的色彩が込められている例は他にも存在する⁶¹。革命期およびその後の恐怖政治で多数の流血事件が続出したフランスに対し、世紀転換期のアメリカ社会の対応は大きく二つに分かれ、党派対立に発展していた⁶²。革命当初は同じ共和制革命として歓迎しながら、その後の血なまぐさい展開に対して、北部保守派は大量の反仏言説を発信するという対応を見せていった⁶³。それに連動した形で北部保守派の牧師たちから、フランス革命に続く恐怖政治の暴力性を厳しく非難する訓戒が発信され、その後、南北戦争期までその暴力嫌悪のディスコースは奴隷制即時廃止論者たちに継続的に用いられていった⁶⁴。家庭向け書物の出版地の殆どが北部であったこと、その著者たちの多くが奴隷制廃止運動にもかかわっていたことなどの背景もあわせて鑑みると、近代家族モデルの中で動物愛護を通して描き出されていた「暴力嫌悪の感性」の喚起は、こうした革命期の政治的歴史文脈の中で捉える必要性もあろう。この点に関

しての詳細は、別の機会に論じたい。

註

- 1 自然を制御可能な相手と見なすようになったのは近代以降の自然観であり、17世紀にはR・デカルトは動物を機械と捉えることにより動物も含めた自然を人間の搾取可能な存在とした。しかし18世紀になると動物にも苦痛を感じる能力があることを問題とするJ・ベンサムが功利主義に基づく議論を展開した。Keith Thomas, *Man And The Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800* (1893); キース・トマス著 (山内昶監訳) 『人間と自然界—近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局、1989年。
- 2 ドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』は、『わんぱくフリッパー』でイルカの調教を担当したりチャード・オバリーが展開した、和歌山県太地町でのイルカ保護運動をテーマに撮影した映画である。この映画の内容およびその問題性については、詳しくは以下を参照されたい。拙稿「動物保護のグローバリゼーションと『国民文化』—映画『ザ・コーヴ』に対する日本の議論を取り上げて」『国際経営・文化研究』(淑徳大学国際コミュニケーション学会誌) vol.15, no.1 (2010年11月): 15-27頁。
- 3 動物に配慮するフェミニストたちによるヴェジタリアニズムに関する議論は、拙稿「暴力・女性・動物—『動物の権利』とフェミニズム—」『ジェンダー研究』第5号(2002年3月): 99-113頁を参照されたい。アメリカの倫理的ベジタリアニズムを白人中産階級女性の人種的アイデンティティと捉える主張については; Cathryn Bailey, “We Are What We Eat: Feminist Vegetarian and the Reproduction of Racial Identity,” *Hypatia* vol.22, no.2 (2007): 39-59; 拙稿 “Vegetarianism; Animal Rights, Feminism, and Post-Racial Identity: Examining Debates over Ethical Foodways in The United States and Presenting New Perspectives,” 『国際経営・文化研究』 vol.14, no.1 (2009年11月): 1-18頁。
- 4 トマス、前掲書; James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pains, and Humanity in the Victorian Mind* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980); ジェームズ・ターナー著 (斎藤九一訳) 『動物への配慮—ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』法政大学出版局、1994年。
- 5 ターナー、前掲書。
- 6 デイヴィッド・モリス著 (渡邊勉他訳) 『痛みの文化史』紀伊國屋書店、1998年。
- 7 西欧社会の近代化の過程を詳述し研究上に長年にわたって多大な影響力を持ったノルベルト・エリアスは、「自己抑制」を近代の新しい感情のスタイルとみる議論を展開している。Norbert Elias, *The Civilizing Process: Sociogenetic and Psychogenetic Investigations*, rev. ed., trans. Edmund Jephcott (Malden, Mass.: Blackwell Publishing, 2000); N・エリアス (波田節夫他訳) 『文明化の過程・下』法政大学出版局、2004年、333-358頁; エリアスの議論に対し、懐疑的な見方もあるが、他方で、欧米社会の17世紀から19世紀前半にかけての私的な暴力が減少したとする点などからエリアスを支持する研究も多数出されている; Barbara H. Rosenwein, “Worrying about Emotions in History,” *American Historical Review*, 111 (Feb. 2006): 821-845; Martin J. Weiner, *Men of Blood: Violence, Manliness, and Criminal Justice in Victorian England* (New York: Cambridge University Press, 2004); Eric Monkkonen, “Homicide: Explaining America’s Exceptionalism,” *American Historical Review*, 111 (Feb.2006): 76-94; Peter Spierenburg, “Democracy Came Too Early: A Tentative Explanation for the Problem of American Homicide,” *American Historical Review*, 111 (Feb. 2006): 104-114.
- 8 ターナー以降の生体解剖反対運動をめぐる研究の動向に関しては、以下を参照されたい。拙稿「19世紀後半の生体解剖反対運動についての研究動向と新たな展望—アメリカ社会における科学、ジェンダー、動物観を議論する意義を中心に—」『国際経営・文化研究』 vol.14, no.2 (2010年3月): 37-48頁。

- 9 Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Alfred A. Knopf, 1992)
- 10 Ibid., 295-301; Elsdon C. Smith, *The Story of Our Names* (New York: 1950); Daniel Scott Smith, “Child-Naming Practices, Kinship Ties, and Change in Family Attitudes in Hingham, Massachusetts, 1641 to 1680,” *Journal of Social History*, 18 (Summer 1985), 556-559.
- 11 Bushman, 282-287; William Gilmore, *Reading Becomes a Necessity of Life: Material and Cultural Life in Rural New England, 1780-1835* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1989)
- 12 Mary P. Ryan, *The Empire of the Mother* (New York: The Haworth Press, 1981), 45-46.
- 13 結婚観が当事者同士の愛情を重視するものに変化していったことについては例えば次の2つの研究を参考にした。; Steven Mintz and Susan Kellogg, *Domestic Revolutions: A Social History of American Family* (New York: The Free Press, 1988); Karen Lystra, *Searching the Heart: Women, Men, and Romantic Love in Nineteenth Century America* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1989); 子どもの数の減少および、その減少を導いた家族戦略については例えば次の研究が詳しい; Stuart M. Blumin, *The Emergence of the Middle Class* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989); Mary P. Ryan, *Cradle of the Middle Class* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981); 19世紀前半期に見られた子ども観の変化については次の研究を参照した; Mary Lynn Stevens Heininger et.al., *A Century of Childhood 1820-1920* (Rochester: The Margaret Woodbury Strong Museum, 1984); Nancy Shrom Dye and Daniel Blacksmith, “Mother Love and Infant Death, 1750-1820,” *Journal of American History*, vol.72 no.2 (1986): 329-353.
- 14 初期の研究で「家庭性」(domesticity)の明確化が議論されている研究は次のものがあげられる; Nancy Cott, *The Bonds of Womanhood* (1977; New Haven: Yale University Press, 1997); Ryan, *The Empire of the Mother*; Barbara Leslie Epstein, *The Politics of Domesticity* (Connecticut: Wesleyan University Press, 1981)
- 15 Katherine C. Grier, *Pets in America: A History* (Orlando: Harcourt, Inc, 2006); K. C. Grier, “‘The Eden of Home’: Changing Understandings of Cruelty and Kindness to Animals in Middle-Class American Households, 1820-1900” in Mary J. Jenninger-Voss ed *Animals in Human Histories: The Mirror of Nature and Culture* (New York: University of Rochester Press, 2002), 316-362.
- 16 Grier, 2002, 348-349.
- 17 近代家族における父親の役割を重視した研究には、例えば次のようなものが出ている; Stephen M. Frank, *Life with Father: Parenthood and Masculinity in the Nineteenth-Century American North* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1998)
- 18 Thomas Searle, *A Companion to the Season of Maternal Solitude* (New York: 1834), 81, 242, quoted in Ryan, op. cit.
- 19 Catharine M. Sedgwick, *Home* (1835; Philadelphia: Davis, Porter & Co., 1865), 14-21.
- 14 20 Jacob Abbott, *Rollo Learn to Read* (1838) in *The Rollo Books* (Harvard College Library, 1855), 152-165.
- 21 詳しくは、Frank, op. cit.
- 22 Sedgwick, “Dogs” in *Stories for Young Persons* (New York: Harper & Brothers, 1840), 153-163.
- 23 Sedgwick, *Love Token for Children* (New York: Harper & Brothers, 1844), 60.
- 24 Sedgwick, *Morals of Manners* (New York: Harper & Brothers, 1854), 56-58.
- 25 Lydia Sigourney, *The Boy's Reading-Book* (New York: Orville Taylor, 1839); *The Girl's Reading-Book*, (New York: Turner, Hughes, & Hayden, 1843); *The Child's Book* (New York: Proudfit & Banks, 1847)

- 26 Sigourney, *The Boy's Reading-Book*, 31-38.
- 27 Ibid., 33
- 28 Ibid., 34-38.
- 29 Ibid., 59-65.
- 30 Sigourney, *Letters to Mothers* 2nd ed. (New York: Harper and Brothers, 1839) 41, 35-36.
- 31 Sigourney, "Child at the Mother's Grave," in *The Girl's Reading-Book*, 191-192.
- 32 L.G.Abell, *Women in her Various Relations* (New York: J.M.Fairchild & CO., 1855), 53-56.
- 33 Eliza L. Follen, *The Child's Friend* (Boston: Leocard C. Bowles, 1849), 127.
- 34 J. Abbott, *Agnes; A Franconia Story* (New York: Harper & Brothers Publishers, 1853), v-vi.
- 35 J. Abbott, *Bruno; or Lessons of Fidelity, Patience, and Self-Denial* (New York: Harper & Brothers, Publishers, 1854)
- 36 Ibid., 97-119.
- 37 Ibid., 119.
- 38 John E. Lovell, *The Young Pupil's Second Book* (New Haven: S.Babcock, 1845), 140-141.
- 39 Charlotte Elizabeth, *Kindness to Animals; or, The Sin Of Cruelty Exposed and Rebuked Illustrated Edition* (Philadelphia: American Sunday-School Union, 1845), 2; John Bigland, *A Natural History of America* (1828), 187; こうした動物への思いやりをキリスト教徒としての義務と捉える言説は、1820年代から盛んになったことから第二次大覚醒からの影響が指摘できる。リベラルプロテスタントの教義等については；Curtis D. Hohnson, *Redeeming America: Evangelicals and the Road to Civil War* (Chicago: Ivan R. Dee, 1993), 3-17.
- 40 C. Elizabeth, 2.
- 41 Charles Morley, *The Power of Kindness; First Series* (New York: Fowler and Wells, Publishers, 1856), 6.
- 42 Ibid., 96-97.
- 43 C. Morley, *The Power of Kindness; Second Series* (New York: Fowler and Wells, Publishers, 1856), 44-45.
- 44 C. Morley, *The Power of Kindness; First Series*, 6.
- 45 Artemas B. Muzzey, *The Fireside: An Aid to Parents* (1849; Boston: Crosby, Nichols, and Company, 1858), 96-104.
- 46 Ibid., 98.
- 47 Ibid., 98-99.
- 48 Abbott, *Rollo Learn to Read*, 152-165.
- 49 Samuel G. Goodrich, *Fireside Education* (New York: 1838) quoted in Frank, 40.
- 50 Frank, 1-8.
- 51 例えば；Muzzey, 314-317.
- 52 John R. Gillis, *A World of Their Own Making: Myth, Ritual, and the Quest for Family Values* (Cambridge, Mass.: Harverd University Press, 1996), 90-92.
- 53 Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the revolution to the Present* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1980)
- 54 Myra C. Glenn, *Campaigns Against Corporal Punishment: Prisoners, Sailors, Women and Children in Antebellum America* (Albany: State University of New York, 1984), 81; Murray A. Straus, Richard J. Gelles, and Suzanne K. Steinmetz. *Behind Closed Doors: Violence in the American Family* (New York: Anchor Press, 1980), 31; Richard J. Gelles, *The Violence Home: A Study of Physical Aggression Between*

- Husbands and Wives* (Beverly Hills, Calif. : Sage Publications, 1972), 13, 20.
- 55 Glenn, op. cit, 30
- 56 Congressional Globe, 30nd cong., 2nd sess., 20: 488-489, quoted in *ibid.*, 39.
- 57 *Ibid.*, Chapter 4.
- 58 *Ibid.*, 30; George K. Behlmer, *Child Abuse and Moral Reform In England, 1870-1908* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1982)
- 59 Dan McKanan, *Identifying the Image of God: Radical Christiana and Nonviolent Power in the Antebellum United States* (New York and Oxford: Oxford University Press, 2002), 20.
- 60 Sedgwick, "Dogs" in *Stories for Young Persons* (New York: Harper & Brothers, 1840), 153-163.
- 61 例えば *Lessons Derived from the Animal World* (1847) では、フランス革命期のテルミドール反乱で失脚したロベス・ピエールの愛犬が、主人の処刑場に駆けつけ、ギロチンが振り下ろされた後も決してその主人の足下から離れようとはしなかったという忠誠心を感傷的に描出する逸話が掲載されている。Anon. *Lessons Derived from The Animal World* (London: 1847), 8-9.
- 62 Rachel Hope Cleves, *The Reign of Terror in America: Visions of Violence from Anti-Jacobinism to Antislavery* (New York: Cambridge University Press, 2009)
- 63 例えば、肥後本芳男「フランス革命とアメリカ建国初期におけるフェデラリスツ」『アメリカ研究』27 (1993) : 73-93頁を参照されたい。
- 64 フランス革命後勢力をのばしたジャコバン政権は、1793年の9月革命で200人以上の牧師を処刑した。アメリカの正統派牧師たち、とくにCongregationalismおよびPresbyterianの牧師たちは反フランス革命の姿勢を打ち出していく。例えば次のような説教があげられる。「フランス革命は恐怖と野蛮の精神を生み出している。フランス革命は虐待と残虐そして殺人によって神に嘆願することを目論んでいる。」Samuel Williams, *The Love of Our Country Represented and Urged* (Putland, Vt., 1792) quoted in Cleves, op. cit, 8 ; こうしたフランス革命の暴力性を強く非難する牧師たちのディスコースはウィリアム・ロイド・ギャリソンやフレデリック・ダグラスのような急進的な即時奴隷制廃止論者たちの主張に読み取ることができる。詳しくは *ibid.*, 230-275.

(受理 平成23年1月8日)